

方向

第一五一号 一九九三年一月一日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

授記 口品 一法華經巡礼 69 1992.12.10 原田憲雄

この品(章)の梵文題名は、*vyākaraṇa-parivāto nama sashah*で、「授記と名づける第六章」。「授記」は、決定的な予言、というほどの意。妙本は「授記品第六」、正本は「授声聞決品第六」と訳す。正本のは、声聞に對し、かれらが仏となるとの決定的な予言を授ける、というのであろう。

さて、本文にはいるに先立ち、ことわっておかねばならないことがある。

前号で「藥草喩品」を了り、そののち荊谷定彦氏の『法華經一仏乗の思想—インド初期大乘仏教研究—』(一九八三年刊)を読んだ。『法華經』前半についての論考で、画期的な業績だと感ぜられた。後半に関するものも、やがて刊行されることだろう。最終的な判断はそれを待たねばならないが、今後の『法華經』研究は、氏の業績をふまえたうえでなければ、進めえないことは、明らかである。

学界の事情にうといわしたが氏の名に注目したのは『印度学仏教学研究』通巻七八号(一九九一年)の「『妙法華』における「小乗」の語について—羅什の法華經改竄—」によってである。氏の『法華經』觀(A)と本論の主題(B)が、はじめに要約されているので、すこし長い左に引く。

A 法華經の根本主題は、(仏滅後)の苦海に没在せる凡夫たる己れ自身(法華經の作者)の成仏にある。法

華経は、その成仏の究極的根拠を「凡そ衆生たるもの、一人の例外もなく、本来からほさつ（|| 仏の実子、成仏確定者）である」（一切衆生皆悉ほさつ）という「仏知見」（*tathāgata-jñāna-darśana* 如来の智慧の直観）に置く。そこから仏出現（|| 仏の説法）の目的は唯一つ、この仏知見を衆生に示し（*sandarsāna*）理解させ（*avatāraṇa*）悟らしめ（*pratibodhana*）道に入れしめる（*gāra-avatāraṇa*）こと、即ち「ほさつを教化すること」（*bohisattva-samādāpāna*）であり、これは、本来よりほさつである衆生を仏にならしめる教えであるが故に（|| 仏乗）（*buddha-yāna*）と呼称され、（|| 仏乗）は一切衆生をそこに包摂し尽すが故に、（|| 仏乗）の他にはいかなる乗も必要がなく、必然的に「一乗」（*eka-yāna*）（|| 乗は唯だ一つ）なのである。法華経に先行する般若経典が、我々は凡夫であっても菩薩（|| 成仏可能者）であり、それ故その教説は大乗（*mahā-yāna*）偉大な乗物）であり、一方、声聞、独覺の二乗は成阿羅漢不成仏の教説であり、小乗（*hīna-yāna*）下劣な乗物）だと主張したのに対して、法華経は、凡夫の自己が成仏できるためには、一切衆生一人の例外もなく本来よりほさつ（|| 成仏確定者）でなければならぬとし、この法華（|| 仏乗）こそ、大乘・小乗の対立を止揚して、しかも自己の内にそれら三乗を包摂して唯一の乗であり、これこそが真の仏の教説であると主張したのである。ところが、『妙法華』の訳者羅什は実にこの般若経の立場——それは、法華経がまさに「大小対立の大乘」にして未だ真の大乘に非ずとして打破し、それをのり越えようとしたところの二乗方便の一乗説——こそ真の仏教とするものであったから、法華経（|| 仏乗）のもつ般若経（|| 大乘・菩薩乗）否定を認めず、逆に法華経をして般若経の傘下に引きずり込み、もって般若経を支持する経典の一つにしようとしたのである。

それは法華（仏乗）と三乗の中の大乘・菩薩乗との同一視に他ならない。ここに『妙法華』にあっては、三乗とは常に「声聞、辟支仏、仏乗」と、あるのである。即ち、三乗とは声聞、独覺の小乗たる二乗と、大乘たる仏乗とであり、「大乘||仏乗||一乗」であって、これは二乗方便の一乗説、三車家なのである。しかし、法華經本来の（仏乗）は決して二乗方便の一乗説ではない。法華經にあっては「大乘||菩薩乗、菩薩乗||仏乗」であり、故に「仏乗||大乘」であるにも拘らず、羅什は『妙法華』において、「菩薩乗」を完全に抹消し、「仏乗||大乘」であることを主張しているのである。ここに羅什の改竄の意図が明白に汲取られるであろう。

以下に展開される論証は、なるほどと思うところが少なくないのだが、羅什すなわちクマラージュヴァが翻訳に際して法華經を意図的に「改竄」したという言葉は衝撃的で、一篇の論旨がはなだ呑み込みにくい。

わたしは幼いころから『法華經』を読み習ってきた。それはクマラージュヴァ訳の『妙法蓮華經』刈谷氏のいう『妙法華』である。後に『正法華經』を参照し、梵本も読むようになったが、『妙法蓮華經』はわたしの心に染み込んでいるから、科学的に見るつもりでもそうはなっていないだろうし、訳者のクマラージュヴァはどこまでも及び難い「恩師」、批判などできるものではない。それがいつわらぬ実感である。翻訳にずいぶん思い切った原文から離れたらしい意訳のあることは、聞きもし、みずから見もしているが、かれの用いた底本が現存梵本とは違ったのだからとする先進の解釈をすなおに受け取っていた。かれが般若系の思想家であることは『大智度論』の翻訳であきらかだが、般若經を擁護するために、意図的に『法華經』を改竄した、というようなことは、

自分の体がさかさ吊りにされたようで、信じる気になれないのである。荻谷氏の他の二、三の論文を読んだ後でもその感じは変わらない。しかし心にひっかかって忘れ去ることもできない。そこで『法華経一仏乗の思想』を読み、最初から最後まで幾度も繰り返し返したあげく、さきに述べた感想に到達したのだ。氏は「序論」にいう。

『法華経』の思想を説明するには、その前提として、ある信仰を奉じる一つの大乗仏教信奉者団というものを想定し、『法華経』は、その信奉者団が自己の奉じる信仰を告白し、大衆に唱導せんがために創作した一種の宗教文学作品であると捉える視点がまず確立されるべきであると考えられる。そしてこの観点に立って『法華経』の思想を説明しようとするとき、そこに取るべき方法は、その信奉者団の創作した『法華経』そのものを深く読むことによって、彼らがいかなる信仰を持ち、それを一般大衆に唱導せんとしているのかを、『法華経』自体の中から明らかにすることであると考えられる。

佐保田鶴治氏の序文によると、荻谷氏の先考は法華宗の本山貫首で学匠であり、氏もまた現に同宗の僧だといふから、『妙法蓮華経』やクマールラジャーヴァに対してはおおむねわたしと同じ感じをもって育ったことであろう。今の氏の批判は、『法華経』の真実を「『法華経』自体の中から明らかにする」ために、自らの皮膚を引き剥がすような思いでおし進めた研究の結果に違いない。

わたしが「法華経巡礼」を始めたのは一九八七年で、『法華経一仏乗の思想』が刊行された四年後である。前もって読んでいたら、柄にもない「巡礼」などしなくとも……と痛嘆される。だが、また考えると、そのころのわたしには、読んでも氏の考えはまったく理解できなかったろう。とぼとぼとした足取りながら、五年かかって、

ともかく妙本・正本を梵本に突き合わせながら巡礼し、その道筋でいろいろの疑問にぶつかってきたおかげで、氏の本にめぐりあい、驚き怪しみながらも、その幾分を理解しえたのであろう。わたしの読解力は、氏の論文を追跡するのがやっとである。ここで「巡礼」をやめて、氏の続篇を待望随喜するほうが賢明だとも思うが、「巡礼」は、もともと、おのれのために始めたものであった。そして、おそらくそれをつづけることが、氏の論考を追尋するうえで、わたしにとっては最善の道であらうから、やめないことにする。

現在の『法華經』が、全部同時に成立したものでないことは、「巡礼」の初めに述べた。本田義英氏は、「序品」から「如来神力品」にいたる間の「提婆達多品」を除いた二十品に「囑累品」を加えたものを「原始分法華經」と呼んだ。その後、学者の間ではさらに分析的な見方がさかんになったが、荻谷氏はそれを不自然として、ほぼ本田説まで返した。しかしその「原始分」にも、後代に増加した部分、すなわち「後分」の竄入していることを指摘する。「授記品」以前についていうと、

「方便品」

一三五偈から一四五偈まで。

「譬喩品」

九七偈から一四九偈まで。

「藥草喩品」

大部分。

が、その「後分」であり、「原始分」とは矛盾する思想の表現された部分だというのである。論証はかんたんには紹介しがたく、関心のある方は直接あたられるようお願いする。「藥草喩品」は荻谷氏によれば「原始分」には全然なかったもの。「後分」を除いた「わずかの部分」はほんらい「授記品第五」の初めにあったもので、そ

のあとに現在の「授記品第六」の冒頭部分が続くのだ、という。それで「授記品第五」のかたちを把握するのに必要であろうから、重複をいとわず、その「わずかの部分」を左に引いておく。

05-01. さて、世尊は、長老マハーカーシャパヤ、その他の年老いた偉大な声聞たちに話しかけられた――

そうだ、そうだ、マハーカーシャパヤ、あなたがたのためには本当にいいことだ、あなたがたが如来の眞実の功徳を語るのには。これらは　カーシャパヤ、如来の眞実の功徳だが、ほかにも無量無数の功徳があり、その究竟に達することは容易ではない、無量カルパのあいだ語り続けたとしても。如来は、カーシャパヤ、法の主・一切の法の王・主宰者・自在者なのだ。カーシャパヤ、如来が、いかなる法を、いかなるところに設置しようと、それはそのとおりに存在する。一切の法を、如来は適切に指示し、如来の知をもって、それらの法が一切知者の地位に進むように設置する。また如来は、一切の法の意味につき自在を得ており、意味の帰着するところを見、一切の法を向上させようとする意向をもち、一切の法を巧みに決定する知は最高究竟に達しており、一切知者の知を教示し、一切知者の知を設置する。カーシャパヤ、これが尊敬されるべく正しく覚った如来なのだ。

05-02. …、同様に、カーシャパヤ、如来・尊敬されるべき・正しく覚った人は、この世界に現われる。大きな雲が湧きあがるように、如来もまた現われて、天・人・アスラと共なるすべての世界に宣告する。たとえばカーシャパヤ、大きな雲が三千大千世界の一切を覆うように、同様に、カーシャパヤ、如来・尊敬されるべき・正しく覚った人は、天・人・アスラと共なる世界の前で、このような声を放って、その大音声を聞

かせる。

05-03. 「諸天よ、人々よ、わたしは如来であり、尊敬されるべき、正しく覚った者であり、わたしはみずから渡りおわってひとを渡し、解脱して解脱させ、よみがえってよみがえらせ、完全に涅槃して涅槃させる。此の世界も彼の世界も、わたしは、正しい智慧をもってあるがままに知る者、一切を知る者、一切を見る者である。ここにおいでなさい、諸天よ、人々よ、法を聞くために。わたしは道について説く者、道の案内者、道を知る者、道を聞かせる者、道に通達した者である」と。

05-04. そこへ、カーシャパよ、幾千万億という衆生が、如来の話を聞くために近づく。そこで如来も、衆生たちに、その機根や精進の優劣の差異をわきまえ、それぞれの法門をわかち与え、それぞれ多くのさまざまの法話を語って、喜ばせ、満足させ、歓喜させ、利益と安楽をもたらすのだ。その説話によって、衆生たちは、現世で安楽になり、死後にも善い処にゆき、そこで豊かな楽しみを受け、法を聞くようになる。この法を聞いて、障害のない者となり、だんだんに、一切を知る者の法に専念するようになる。その者の力により、場所により、勢いによって。

05-05. ……同様に、カーシャパよ、如来、尊敬されるべき、正しく覚った者が、法を説くならば、すべてその法は、同一の味、すなわち解脱の味、離欲の味、滅尽の味をもつのであり、一切を知る者の智慧を最後の目標とする。そこで、カーシャパよ、衆生たちは、如来が法を説くのを聞き、記憶し、専念しても、かれらは自分で自分のことを知らず、理解せず、覚りもしない。なぜなら、如来だけが、カーシャパよ、あの衆

生たちについて知っているのだ、かれらが何者であり、どのようであり、何に似ているかを。かれらが何を考え、いかに考え、何によって考えるかを。また何を修行し、いかに修行し、何によって修行するかを。また、何を達成し、いかに達成し、何によって達成したかを。如来だけが、カーシャパよ、目の前に知り、目の前に見るのだ、衆生の傾向を尊重し、すぐには一切を知る者の智慧を説き聞かそうとはしない。……あなたがたは、カーシャパよ、奇異とも希有とも思ったが、それはあなたがたが如来の微妙な言葉をさとることができないからだ。なぜなら、如来、尊敬されるべき、正しく覚った者の言葉は、理解しがたいものであるからだ。

05-06. さて、世尊は、そのときこの意味をさらに明らかにしようとして、これらの偈を説いた

法の王なるわたしは、有を破摧する者として、世界に現われ、

法を説く、衆生たちの願いを知って。(1)

智慧ふかく偉大な導師は、語るべきことを久しくまもって、

秘密にし保持したまま、語らない、衆生たちには。(2)

その知識はさとりにくくて、愚か者はふいに聞いても、

こころ鈍く、疑いをおこし、みち踏みはずし、さまようだろう。(3)

わたしは説く、その境涯や、能力に応じ、

それぞれのものごとにより、見方を正しくしてやるのだ。(4)

たとえば、カーシャパよ、雲が下界から湧き上がり、

一切をつつみ、大地を覆うようなものだ。(5)

水気に満ち、電光の花環で飾られた雲が、

雷鳴をとどろかせながら、歓喜させるだろう、一切の生物を。(6)

05-07. 同じように、仏もまたこの世界に現われる、カーシャパよ、雲が世界に現われるように。

現われて、この世界を救う人は、衆生たちに説法し、真実の道をさし示す。(16)

大いなる聖仙は、天と共なる世界で尊敬され、こう語る。

如来・両足なる最上者・ジナであるわたしは、世界に現われた、雲のように。(17)

わたしは満足させるだろう、三界に執着し、体の萎え枯れた、一切の衆生たちを。

苦しみに萎え枯れた者を安楽にさせ、快楽を与えるだろう、涅槃も。(18)

わたしの言うことを聞きなさい、天と人との集いよ、近づきなさい、わたしを見るために。

わたしは如来・世尊で、及ぶものなく、濟度するため世界に生まれたのだ。(19)

わたしは自ら証した法を明らかにし、機会をみて仏の菩提を説きあかす。

これがわたしの無上の巧妙な方便であり、一切の世界の導師たちのもの。(43)

すぐれた真理をわたしは如実にこう説くのだ「すべての声聞は涅槃に入ったのではなく、

最善の菩提への修行をして、これらの声聞たちも、やがて仏となるだろう」と。(44)

鉢植えの紅い花

1992 12 12

原 田 慶

その名まえは知らない

肉の厚く広い葉を

スプーンのようにくねらせ

鉢の外へ

うらおもてかまわずはみ出す

茎の根もとには丸い葉を

風車の形にならべ

枝先に群れて咲く小さな花は

テーブルの上で

私の心臓の鼓動といっしょに

こまかくふるえている

あなたは どうしてここに いるの だろう

風が戸をガタガタゆするけれど

たれかをさがしているようでもなく

ほかに何の物音もない昼下がりは

むしろ不思議な気持がする

人々がみんな田畑へ出かけて行った

遠い昔の日に

たった一人

置き忘れられた子どもが

自然の呼吸をつよく感じるように

それともすでに地球は

時を失ってしまったのだろうか

名も知らぬ鉢植えは

小さなプラスチックの中で

ただひたすら深紅の花を咲かせている

死なせてはならない

1992 12 17

原 田 慶

風に舞う落葉を

かぞえていたのは数日まえ

気がつけば街路樹は

空に向かって裸の枝をつき出している

そんな風景に見馴れてしまったことにさえ

気がつかなかった

自動車の列もせわしなく

窓の外は師走

道路の向い側の中学校では文化祭が終り

期末試験もすんで

門のわきの立て看板だけが

ぼつんと白い

校舎は一年の間に

新入生を迎え夏休みがすぎ

秋が来て冬になり

磨き立てられたり忘れられたり

リボンやテープで大きな贈り物のようにつつまれたりして

花が咲き落葉が散り

そんなふう過ぎてゆくものだと

すっかり憶えているのだが

その度にまるで初めてのよういそいと輝いてみせる

生徒たちは黒いつめ襟をぬぎすてて

紺のブレザーにチェックのずぼん

ぞろぞろと歩きながら

いつもだれかが道化をやっている

「夜はよく眠れるし食べるものはおいしいし風邪も

あまりひかないしこれは親に感謝ですねただ血圧

が時どきぐっとあがるんですでもこうして毎日お
医者さんに来ていれば薬がよくきくからだらしく
てこれも安定しているしほんとうに親に感謝です」
「わたしはずっとまえから眠れる薬をもろてますさ
かい飲んだらもう起きてられへんです五分くら
いでねてしまいます」

「夜がようねられたらよろしなわたしはゆうべ八時
におふとんにはいって十一時が鳴ったのまで知っ
てました十二時は知りませんでしたけどなあ」

「そんなに眠れなかったんですかそりゃ大変だわた
しは若いときからねつきがよくて五分くらいで眠
ってしまっただけこの頃は十五分くらいですねそ
れと夜中に一回はおしっこに起きるようになって
これが寒くてたまらんですそれも走るようにし
て行かんともれるんです年をとると神経がゆるく
なるんですね」

「一回くらいならよろしいわたしら四回くらい起き
まっせ」

呼ばれたお婆さんが診察室へ入って行った

「あのひと子どもがないのかと思てたら息子さんが
あるんやてな」

「そうやアメリカにはるんやて」

「アメリカ？そらあかんわなんぼ子どもがあつたか
て外国にいたのでは何の役にもたたん」

落葉が一枚

自動ドアのすきまから

ひらっと忍びこんできた

かさかさに衰えたカエデの葉は

人の足に踏まれてたちまちこなごなに
くだけてしまう

いつも口を鳴らしているお婆さんはこの頃

待ち合い室へ来なくなった

チエツチエツと舌が鳴って止まらない

「あのひと神戸の方に住んではったんですやろ御主人は船長さんで兵隊に行つてそのまま戦死しはつたらしいその頃のよかつたことをいつでも言わはりますやろ」

「そうです主人がいはつた頃には若い人がよう遊びに来ていろいろおもしろかつたらしいいつでもおんなじ話ばかりしはりますやろ」

「まああんたみたいな人がああいう人の話をせい出して聞いてあげたら功德になるんやあんたは御主人が広い家屋敷やら財産をいっぱい残して死なはつて今はそれこそしたいようにしてのんきに暮らしてゐるのやさかい」

「あつははほんまにすぎなことしてなあ」

老人たちはそれぞれの運命を生ききてきて

ひにくやじょうだんの中に

ほんのすこし意地悪もきかせて時には
怒りの表情をのぞかせることもある

窓の外は北風があてもなく吹き抜けて

引きずられて行くごみのかたまり

色あせたおもちゃ屋の看板

人のいない楽器店

待ち合い室の老人たちはめったに

外を見ようとしない

若い日に看護婦学校の生徒の着物を仕立てたという

はなし

息子の友達が遊びに来るとおもいをふかして

おやつに食べさせたというはなし

中国人は布製の手縫いのくつをはくので足音がしな
い八路軍が来た時には息子と二人でベッドの中でか

らだを耳にしていたなどはなす

その息子も定年をすぎたというところで

わたしはふと現実に取りまもどされた

「みんな長生きするようになって結構なことですけどからだの自由がききまへんさかいにかなひませんなあ」

「ほんまに生きてるゆうだけすわなんにもすることあらしませんしテレビも見たいようなもんもおへんしなあ」

「わたしら死ぬのはちよつともこわいと思ひませんそやけどむりに死ぬわけにいきませんさかいのちのあるあいだは生きてんとしようがありませんわなあ」

「そういうことですがなほんまにさあわたしそろそろ帰りますわあんだ帰らはらしませんか」

「わたしも帰りますほなどなたさんもおさきいどす

おおきにごやっかいどした」

菓の紙袋を手押車に入れて方向を定めるとゴトゴト
と帰って行く

看護婦学校の生徒はもう着物を着ない

中学生につめ襟ははやらない

戦争はなくならないけれど

思い出はひとりひとりのなかで風化するだろう

すれちがって行く若い人と老いた人とは

空飛ぶ虫たちほどにも気にかけていないように見える

老人の中に脈うっている熱い思いを

死なせてはならない

恐怖や怒りよろこびなどのこころこそが

いのちそのものなのだから

謝靈運が、やむなく仕え、やむなく反乱し、そして四三三年に刑死を与えられた、宋の朝廷は、かれの死後半世紀もたたない四七九年に滅びます。皇帝が、軍人あがりの宰相の蕭道成(しょう・どうせい)に帝位を譲るというかたちで、政権をうばわれ、新しい皇帝が国号を齊(せい)と定めたからです。蕭道成が齊の高帝です。三年のちの四八二年三月、高帝は死に、皇太子の曠(さく)が嗣ぎます。武帝です。武帝には二十三人の男子があり、長男の長懋(ちようぼう)と次男の子良(しりよう)が穆(ぼく)氏を母とし、兄は四五八年、弟は四六〇年に生まれ、ふたりはたいへん仲がよく、ともに学問が好きで、幼いころから篤い仏教信者でした。武帝は即位の年の六月、長懋を皇太子に立て、子良を竟陵(きやうりよう)王に、他の子や孫もそれぞれ王に封じました。ここで語るのは、竟陵王・蕭子良です。

幼いころ、母が父の不興を買って別居させられました。子良が庭でしょんぼりしているので、父が「どうしたんだ、本を読まないのか」と聞きますと、読書好きの子良が「母さんはどこ? 本なんか読む気になれないの」と答えたので、父は可哀想に思っ、母親を呼び戻しました。そんな話が伝えられるほどやさしい気象でした。腹ちがいの弟が多く、かれらの間でも、親子の間でも、しっくりしないことが度々あったのですが、かれがごりなすと、おおむね事はおだやかにおさまりました。

祖父の高帝が即位した年、かれは二十歳でしたが、前代の過酷な徴税方法を改めるよう上書しています。父の

武帝が即位してからもたびたび献策し、四八四年、二十五歳で、司徒となりました。宰相です。武帝は専制君主で、すべてをみずからがとりしきらないと気に入らず、竟陵王が兄の皇太子と協力して手腕を発揮しえたのは、おもに文教面でした。けれどもかれの努力は、この時代から次の時代へかけての南朝文化の基礎を築き、つづく隋・唐文化への水路をひらいたといってもよいと、わたしは考えます。

かれは、個人として学芸にも実務にも才能ゆたかな人でしたが、それよりも注目すべきは、多くの人々の才能を発見し、育成し、かれらの力を結集して、新しい社会と文化を形成する推進力とすることができ、それを実行したことです。

かれは生まれたときから地位が高かったのですが、おごるところがなく、学者や、文人、芸能の士を礼遇したので、その方面の有名な人たちはみな、かれの邸宅に集まりました。一種のサロンです。サロンというと文学的な談話を楽しむ会合をいうことが多いのですが、かれのは、それだけではなく、古典を抄写させたり、『四部要略』という一千巻にも及ぶ百科事典を編集したり、儒教・道教・仏教の学術講演会や討論会をひらき、また名僧を招いて仏教の法要をいとなみ、その教理・信仰を人々に勧め、仏教讃歌を制作・演奏させたりしました。かれの邸に集まる常連のうち、特に有名なのが、竟陵王の「八友」と呼ばれる人たちで、年齢順に挙げると次の通り。()内の数字は生卒年、その下の地名は、地望、すなわち自称の本籍です。

沈約 (しん・やく、 四二一―五三) 吳興 (ごこう)

范雲 (はん・うん、 四二一―五〇三) 南陽 (なんよう)

任昉（じん・ぼう、四六一—五〇八） 柔安（らくあん）

謝朓（しゃ・ちょう、四四一—四九二） 陳郡（ちんぐん）

蕭衍（しょう・えん、四四一—五〇九） 蘭陵（らんりょう）

王融（おう・ゆう、四七一—四九三） 琅邪（ろうや）

陸倕（りく・せい、四七〇—五二六） 吳郡（ごぐん）

蕭琛（しょう・ちん、四七六—五二七） 蘭陵

任昉が子良と同一年で、沈約がほぼ二十歳、范雲が十歳年長であるほかは、みな子良より若く、蕭琛のごときは十八歳も年下です（蕭琛の生卒年は『梁書』の伝に拠るのですが、記事と合わぬところがあります）。謝朓と王融は子良と前後して死にましたけれども、その他は、竟陵王の「友」とはいえ、それぞれの活躍は、次の舞台である梁朝においていっそう発揮されたといふべきでしょうか。その時代については後に述べることにし、ここでは竟陵王の短い生涯とその事業を素描しておきましょう。

四四七年七月、蕭道成は宋の皇帝を殺させ、順帝を擁立し、道成は宰相となります。各地で義軍が起ります。その討伐戦に従軍中の十八歳の子良は、父から寧朔將軍に任命されます。これをはじめとし、二、三の官職をへて安南長史となり、四七九年、二十歳で、使持節、都督会稽・東陽・臨海・永嘉・新安五郡、輔国將軍、金紫光禄大夫、守となります。このときの部下に范雲がいて、他の誰もが読めない古代の碑文をすらすらと読んだので注目し、見識が高く、直言して、権貴にへつらわれないところを見込んで「友」としたのです。

このとし祖父の道成が帝位に登って、国は斉となり、子良は聞喜県公に封ぜられます。四八〇年、二十一歳、母の穆氏が死に、子良は官を去ります。喪に服するためです。のち征虜將軍、丹陽尹となり、私財をなげうって、属県の貧民を救済します。史書はそのことを記すだけです。母の冥福を祈っての布施だったようです。次の年、二十二歳。管内を視察してまわった結果でしょう、民は貧しく、湖沼や荒蕪地が多いから開墾事業を始めたいと上奏し、許可を得るのですが、直後に官職がかわり、事は実行されずに立ち消えになりました。しかしこのころの生活はかれの気持ちにびったりだったとみえ、「行宅」（旅先の仮舎）という詩の断片が残っています。

わたしは生まれつき率直素朴で、のんびりした野外の生活が好きだ。先年、浙東に向勤務したとき、江山の美景や名都の勝境をつぶさに見てまわり、山岳・平原・石溪・林道にであえばことごとく登臨し、一足ごとに新鮮な感情に駆り立てられ、曲池や激湍になじみの風景を思い出したりして、そのたびに吟詠して心を述べた。

家をさがしに北の山かけをたずね

土地をみつけた西の野のはてに

おさない頃から小鳥や魚がすきで

くさむらの生活が羨ましかった

これはおそらく真情だったでしょう。しかし、かれの山野の跋渉は、風景の美を楽しむだけではなしに、人民の生活の向上を願う気持ちに裏付けられていたようで、政治家としての義務感にもよりましようが、仏教徒とし

ての供養観にもふかく根ざしていたのであろうことは、かれの他の数々の救済事業から推察できます。

四八二年、二十三歳、祖父の高帝が死に、父が帝位につき、子良は竟陵王に封ぜられ、邑二千戸。使持節、都督南徐・兗二州諸軍事、鎮北將軍、南徐州刺史となります。このときかれは釈迦仏像を建立し、その「記」を沈約に代作させ、また銘文を作らせています。「記」から察すると、祖父高帝の冥福を祈る気持をこめたものようです。沈約は、竟陵王の兄である皇太子長懋の部下でした。

四八三年、改元して「永明」といい、武帝が死ぬまでの十一年間は、国力が充実し、文化が高揚し、その年号を後の代に記憶させる平和な時代となりました。

この年、子良、二十四歳、侍中、都督南兗・兗・徐・青・冀五州、征北將軍、南兗州刺史に徙り、四八四年、二十五歳、政府に入り、護軍將軍となり司徒を兼ねます。このころ任昉が記室參軍としてかれの部下となります。四八七年、子良二十八歳、正位の司徒となり驃騎將軍に進められます。かれが十首一連の「永明樂」を作り、ひとにも作らせたのは、この頃のことでしょうか。時代の太平讃歌です。武帝は、これを愛して管絃樂として作曲演奏させたけれども、正式の宮廷音楽のうちには組み入れなかったそうです。『樂府詩集』に謝朓の十首と沈約の一首、べつのところ、王融の十首がのこっていますが、竟陵王のものも、「美なり」といわれた釈宝月の作品もなく、どうやら失われてしまったようです。

※本号の発行をもって、方向社同人の年末年始のご挨拶に代え、読者諸賢の愛読に感謝し、ご清健を念じます。